

William Faulkner の詩 (3)

- I) 『春の幻想』 *Vision in Spring* 全訳
- II) 『操り人形一家』 *The Marionettes* 全訳
- III) 解説

森 田 孟

- I) 『春の幻想』 草稿版 1921
Vision in Spring, Manuscript Edition 1921

[I] 春の幻想

そして遂に、彼の裡で叫んでいる声のあとを追ってきて
変化してゆく影のヴェールを貫いてきた夕べが 降りかかったのだ
度を失って立っていた彼の上に。彼の周りには
展がっていった 鐘の広がりゆく円周が。

するとそれからもう一つの鐘が 星のように滑っていった
彼の辺りに澱んでいた静寂の下を、そして眼覚めさせたのだ
突然 とりとめのない痛みを。それは——と彼は言って身を震わせた——
私の心だ、私の破れた昔の心なのだ、と；

私が大層注意深く護った心は
種子の生育もなく、一日一日行ないを重ねれば
それを年寄りかうたたねでできる庭にすることも出来たろうにそれもないまま
破れて消え去ってしまったのだ。

というのも私は非常に多くを求めていたので、無視したのだ
人が貯える筈の小銭では たとえ平安は、
疲れた足がさまよえる一隅は、買えるにしても…

彼の上で、素早く、細っそりと、

木々は緑の袖に包んだ銀の腕を投げ上げ、
艶のある手足や大枝は
太古の音楽に合わせて静かな拍子で動いていた。
そしてそれから再びその踊り手たちの

肩は 彼が夢見たものだったが 彼の前に漂った
穏やかに、悲しみに沈むこともなく、夕べの空気の海で；
唇は旋律を繰り返し、冷え冷えとする日没を支えていた
彼らの髪の秋となった静寂の中に。

軽やかに彼らは 彼の周りに立ち現われて魔術で活気づかせ、
彼自身の生命は 大層ぐったりしていることを両眼が示していたが
再び躍動し出した：この美しさが彼の心を動かした、静かに、ものうく。
空の柔やかな手が

彼の上の細い月を繊細に揺すり
木々の先端を震わせたので 彼には聞えたのだ
木々の葉の接吻が；すると何と！ その葉は消えていた。
彼は手を上げて動揺し

声を挙げて叫ぶところだったが、枝々同様に黙っていた
枝々はびんと張って幽かな反復句を唱しながら
周りの小蜘蛛の遊糸のようにくっついて、彼をそっと罫にかけていた。
すると鐘々が再び

落ちてくる木の葉のように、静寂から鏡に写し出されるように鳴り響いた；
それで彼は沈黙したまま心も空ろに
思案した：私は探し求めていたものを得たのだ、それが粉々に砕けて
今 私の手を逃れていったのだ と。

何故なら私は、粗野な笑いの回廊をあくせくして

苦痛の暗い貯えの中に光を探し求めていたのだから；
 私は何をすればいいのだろう、年若い疲れ孤独で、
 一人で再びとりかかるとは 余りにも疲れているのだから。

彼の頭上に柔らかく闇の澄んだ波が
 現われて木々を充たし
 硬い枝々を鎮めて動きやめない珊瑚にした。
 彼は硬ばった膝を伸ばして立ち上った。

春は、幽かに星の光る闇の中を白く吹かれていたのだが、
 再び彼の周りに姿を現わした、壁のように、
 その下に彼は立って見詰めていた、どんどん冷えてゆきながら
 星が一箇清浄に落下するのを。

〔II〕 間 奏 曲

もう一度 さわやかな星のきらめく夕べが
 この人通りのない街路や壁に降りてくる；
 もう一度 世界は闇の中に沈む、と彼は言った、
 穏やかに星々が頭上にさっと一せいに現われたのを見詰めながら
 棺の上を吹かれる蠟燭の炎のようだ……
 そして光の揺らめく炎を残して昔の石にささやきかける。

ざわめく枝々が闇に接して身振りを示した
 彼の上で；屋根の先端は狭く黒くてくっきりしていて
 鋭く際立った額のようなだったが 星の輝く髪をなびかせていた。
 いつの日か彼も、また、死なねばならぬ、空気は
 彼の上で揺れている木々で震えていたし、影は投げ上げられては
 無益に闇の中で身振りを見せて落ちて 消えてしまった。

私はそれらが 澄んだガラス状の星の白さの
 静寂の中を通過するものうそうにそこへ入ってゆくの見詰めよう……

影と静寂と薄明と星々と……それらは通過してゆく
彼らの髪のとりとめのない音楽の中を
最後の暗いサラバンドを踊ろうとして
粉々の斑岩と珊瑚の砂の上で。

ゆっくりと厳かに、そして回転せよ
喉を上げて髪をなびかせて
膝を殆ど動かさずに、柔らかな胸を見せて。
ゆるやかな巨大な水域が ゆっくりと燃やすのだ
動かぬ空気を。
厳かに 澄んだ幻想的な笛が 静かに

反復する 踊ってゆく足が
充実した見慣れぬ拍子を踊るのを、
変化で、おお 音も立てぬ変化で 戸惑った動きを；
厳かに、澄んだ幻想的な葦笛が
明瞭に暗い単純な必要を繰り返す
誰かの何かの何か依然として見つからぬ至福の必要を
静かな苦痛のうちに祝福し接吻せんとして……

ゆっくりと、厳かに、そして回転せよ
この世の黙々たる暗く夢みる顔の向う側へ。
君の木管を持ち上げよ：旋律が繰り返すのだ
露に濡れた足の穏やかな堂々たる迷宮を；
厳かにその澄んだ幻想的な木管は反復するのだ
その動きを、厳かに再び
その素朴な旋律は繰り返すのだ。

ゆっくりと、厳かに、そして回転せよ。
穏やかに悲し気になった君の顔を上げよ：君の眼を、
探求し溜め息をつく君の口を 持ち上げよ
何かまだ味わったことのない至福がただ必要になって
静かな苦痛のうちに祝福し接吻せんとして……

角状突起の付いた門が揺れて開き、びったり閉じた。
 かつて繊細な声で歌った暗闇の
 蒼ざめた空虚な波が 膝のように盛り上り
 そして下ってゆく、遠くへ下ってゆく、遙かな海域の下へ震えながら…

彼は このぞっとさせられる通りを歩いてゆき
 足で空ろな舗道を鳴らしていった。

[III] 世界とピエロ 夜想曲

i

ここ、色々な世界の物音が海に沈み
 波また波が山のように木霊するところに、
 ピエロは夜の闇のそばに 青と銀色の円柱のように立っていたことだろう。
 その円柱はオレンジ色と緑色できらきら光り、
 その円柱は 彼が見てきた世界の諸相で埃まみれで、
 その円柱は 白い星青い星で凍っている。
 そして今 空気は氷のように裂けてきらめいている。
 繊細に 月の影響を受けて。
 月は風に吹き飛ばされてきた発光鳥であり
 ピエロは単独で闇に現われた蛾なのだ、
 翅が冷気で焦がされ、
 骨のない両手のように縁で丸まってしまう蛾。

ピエロは回転し旋回する……

ピエロは 色々な世界で明るくなった闇を引っばる；
 彼の影は 彼の前の氷の上を素早く走る。

彼は旋回する、星の降る闇に包まれて、
 彼の血の気の失せた両手は 二本の蠟燭の炎のようで
 絶えず闇の上で燃え続けている
 己が胸におかれた彼の額の屍のそばで。

徐々にやせ衰えた月が黙々と彼の髪を梳く；
彼は周りを覆う月光の
檻の中にいる：月は空に上った蜘蛛で
彼の心に氷のような銀を織り巡らせている。

ピエロは回転し旋回する……

暗い絶壁に接する暗い海が銀色に突進し
空の喉におかれた歯のように凍りつく。
素早く笑いが、素早く声々が飛んでゆく
銀の翼をもった氷の鳥たちのように。

ii

コロンバインは 細蠟燭の上にかがむ：
コロンバインは 薔薇をはね飛ばす。
彼女はピエロの足元に 切断された手をはね飛ばす。

背後には、星々の直立した壁、
下には、雪の舞。
ピエロは回転し旋回する、ピエロは快速だ；
彼は月の前に両手を小鳥のように旋回させる。

ピエロは回転し旋回する……

彼の眼は多くの世界の諸相で充たされる
白、青、緑に；
それで彼は頭を隠したいと思うが、その鋭い青い闇は
彼の両腕を顔から切り離すのだ。

聞きたまえ！ ヴァイオリンは
大層きらきら輝く薄刃へと凍りつくので
彼の頭脳を貫いて彼の心臓にまで到り、
彼は音楽のピンで闇に突き刺されるのだ。

すみやかに動きの断片は月の向うに吹かれてゆき、……

コロンバインは紙の薔薇を投げ飛ばす。
 ピエロは白蛾のように闇の上を軽やかに飛び回る。
 細蠟燭は真黒く、その口は星の光の中で鋭く、
 空の砂漠は氷のように冷たい根のない花々で荒寥たる光を放つ。
 その花々は堅く凍っている、真白になって。

iii

ピエロは硬直した木々の間に 没り陽が沈むのをずっと見ていた、
 すると闇は奇妙な様子になり
 星々と静寂とで埃っぽくなって、
 死ぬ；だが 決して変化はしない：
 彼だけが、年老いることで死なねばならぬ。
 そして彼は 薄い爽やかな闇が頭上に
 高く清浄無垢に展がった空を転がされるのを見る、
 彼はそれが 突如 火のように冷たく旋回し
 赤くめらめらと燃え立つのを見る；
 彼は立ったまま 周りを回転する天空を見詰める、
 星の光に照らされた水が飛び跳ねて燃え
 ぎざぎざの歯のように凍りついて闇を引き裂くのを見詰めながら、
 粉々に碎ける海が膝のように盛り上がり
 長い空の壁を揺すり、
 喧いて下に落ち
 星が縁取る闇の下に再び退いてゆくのを見詰めながら。

彼の背後には闇があって 西方へ押し進んでゆき、
 彼の上では物言わぬ星々が空中をひらめき降る。
 これらの星は、とピエロは考える、そこで凍りつきながら
 森の中の髣髴しい巡礼者のようだ、
 それらは盲目の人々のようで、大変穏やかで白いと。
 だが 君は若いのだ、ピエロよ；君は知らないのだ
 我々は夜と夜との間に囚われている魂だということを；
 我々はここではただ 声なき巡礼者なのだというのを、
 彼らもかつては君同様、若い時は尊大だったが、

今では 我々の費した夢と共に吹き飛ばされるのだと。

ほら、ピエロよ；翼のある眼が常に前を飛んでゆく君よ、
若さが 輝く剣のように君の脇腹にぶら下っている間に；……
君には頭上の壁また壁の上に空が見えないのか、
死滅しなかった君の薔薇は 紙の薔薇だとは
分らないのか。その通り、君はただ 不滅なものしか見ないのだ
足と時とによって滑らかにすり減った輝く階段の上に。
十分に見たまえ、ピエロよ；君の前には表玄関があるよ
君には突破することもできないし、乗り越えられそうにもないが。

iv

上空、北極星の辺りでは、回転するのだ
星座が、空の幽かな壁の下を漠然と旋回しながら；
下方では、夜明けと夕方に水が燃えるのだ、
なのに君だけが、ピエロよ；君は死なねばならぬ；……
君、君の生命の矢がつかえられる銀の弓よ。

大弓の矢の先には翡翠の欲望が付けられ、君の錯覚の羽が付けられる、
弓は引かれるが、放たれない
というも 君には確信がないからだ、君はやはり恐れているのだ
投げ矢の当る的を自分がはずすだろうと。
それで君はそのまま休止して、空が明白に燃えているのを見詰める
着々と戻ることなき無数の巡礼たちが角灯を使うので；
君には聞えるのだ 彼らの戯かに歌う歌が平野を充たすのが、
君には一人が休止するのが分る：彼の角灯は突如暗くされ、
それから明るくめらめら燃える、そして再び彼は先へと歌い進める。

v

ピエロは山の頂きに小さく高く坐る、
彫刻された星の光の中で霜をかぶり、硬直して頭を下げる
星々に頭をぶつけないように、
そして見詰めている 崖の側面が湧き立っているのを

盲目の小鳥たちのように
 言葉の翼で空気を打つ声々で。
 闇は 遙かに騒がしく乱れる息づかいで 震える。

ピエロは自分の堅琴の上に頭を下げて
 その調べを指の間からゆっくり落とす、
 真紅の血の滴りのように：
 彼は真紅の音の薔薇を 仰向いた顔々の絨毯の上で粉々に砕く。
 彼は手足が寒さで己れの中に引っ込むのを感じて
 かじかんだ手を下へおろす
 堅琴の上に氷を落とすように：銀のちりんちりん、
 彼の頭の辺りで 冷たく鋭くなった調べの旋回。
 それらは回転し消えてゆく、何と素早くそれらは去ってゆくことか！
 ピエロはその最後の調べが消えるのを見詰め
 それから自分には全く見えも聞こえもしないことに気付く。
 それが、とピエロは言う、私の心臓だったのだと
 それは破れて私からさっと離れてゆき
 夜に自らをぶつけて粉々に砕いたのだ、
 私を凍らせて聞こえも見えもしないようにしたのだ と。

そして己れの顔が凍って穏やかな仮面になるのを感じ
 空が自分の眼の中へ泳ぎ下ってくるのを感じて、
 ピエロは顔を上げ 星の光の中で言葉を失って
 両腕を上げて叫ぶのだ
 静寂のきらめく輻の上で回転する星々に
 凍って燃える海へシューシュー音を立てている星々に。

vi

星々は 歌を歌っている明るい顔をどんどん近づけながら、
 それぞれ彼の心の向うへ清浄無垢に進んでゆく。
 新たな声々はその群に加わる、ますます明瞭に：……
 他の巡礼たちが乗り出そうと待ちかまえているのだ
 頭上の渡んだ大洋へ。

ピエロは回転し旋回する……

都市が闇の中で彼の下に波のように打ち寄せている。

闇は 更に小さな世界が幾つも集った世界で

すみやかに回転している 音を立てない光の環を連ねて。

ピエロは回転し旋回する

闇の中で金切り声を立てながら飛びかかろうとする屋根屋根の間の
狭い通路を流れてゆく星々を見詰めながら、

開いた棺を越えて

風に乗って吹かれてゆく色紙・紙玉のような星々を見詰めながら、

踊る少女たちの髪に付けられた花卉のように吹かれてゆくのを。

彼は 誘肉祭がめらめら燃えながら通過してゆくのを見詰める

ガラスに映ったひらひら飛び回る影のようなのを、

彼は 音の環の連りのような

音楽を見、その環の間で乙女たちの胸が縮んでゆき

顔が粉々になってゆく花卉のように目の前を幽かに旋回するのを見る。

松明が冷たい星々の上で煙を放って円周をなし

呼ぶ風に打ち砕かれるが、それは突風の如く

黄金の神々や、翡翠やエメラルドの神々、

象牙やガラスの神々の周りに起り

その辺りを飛び跳ねている衣装をまとった踊り手たちを燃え上がらせる。

叫びは消えゆき、王たちは去り

松明の煙は星々の間を吹いてやがて見えなくなる；

するとピエロは 影が石の通りをちょこちょこ走るのを見詰める

その間うずくまっている彼の上に、彼の心の影がぼんやりと姿を現わすのだ。

vii

ピエロは震える、彼の魂は提灯で、

死んだ木々の庭に悲し気に吊り下っている。

彼の魂は、かつて彼が大層注意深く己れの前に持ち運んでいたものだが

今や蠟が溶けて滴っている：炎は殆ど消えて

元の闇に返ってしまった。

ピエロはぎこちなく立ち上る、石が彼の両膝を痙攣させたのだ……
やがて自分の魂は弱った炎の中に赤くなって消え失せるだろうと彼は思う。

今やその激動も叫びも消え失せてしまい
音楽は空に薄っすら紡がれるので
彼は一人で立ち止る、彼は立ち止って
これら奇妙な灰色の^{まぼろし}幻が動き回って
宮殿の戸口戸口に平身低頭するのを見詰めることだろう。
彼は一人で立ち止る、彼は立ち止って
見詰めることだろう 突風にあおられた木々の葉が闇の中ではためくの
人間の心の彼方に。

音楽が幽かになってゆき、彼の眼は霞んでゆく；
影は各々その膝掛けを持ち上げて旋回し去る。
闇は急いで戻ってきて 松明を水浸しにする
両手のように彼に掲げられていたのを；
それで彼自身の両手も かつては白かったのに 灰色に溶解する。

viii

ピエロは、闇の中で堦の上に冷え冷えと坐って、
角ばった冷たい石が手の平にひりひりするのを感じ
闇が家々の間の屋根から屋根へと凍るのを見ながら
身じろぎし、両腕をしっかりと組む。
星々が人通りのない街路を向うへ揺れ戻り
幽霊のような顔々は彼の心の向うまで 星々同様吹かれてゆく。

今 その都市が黒く冷え冷えと空虚になるからには
自分は誰なのだろう、とピエロは考える、自分は誰なのだろう
魂を空の向うへ硬ばったまま伸ばすなんて、と。
自分は誰なのか、静寂を足取りで細かく削って
それから再びその静寂が自分の足取りを充たすのを見るなんて。
風が私の周りでますます大きな音を立て、苦痛で金切り声を挙げ
花卉のついた顔々を私の心から吹き払う。

私は一人でいようか、
私は一人で留っていて 死者が通過するのを見詰めていようか
月にべちゃべちゃ語りかけ 紙の薔薇の花卉を一枚また一枚とねじり取りなが
ら、……
それとも私は自分自身の顔をコップの中に見ているのだろうか。

むしろ私は見詰めるだろう 星々が空を向うから揺れ戻ってきて
棺の中の木々の葉のように通りを一杯にするのを；
死を待っている老人たちの髪を一杯にするのを、
その間私は 崩れるのを待っている塀の上で
気が遠くなってゆくのだが。

もう暗い とピエロは言う、今や夜が訪れて
私の周りに鉄の壁のように立ちふさがるので、私は口がきけない；
私は口がきけず 星の光の中で巨大になる。
私は闇の中で海の上に突如現われる絶壁であり
私は青と緑の鎖で縛られている；
私は周りを音の森に囲まれて一人きりで
これまで自分が感じ見てきたあらゆる美と織り混ぜられているのだ。

ごらん、君の上で逆さにされた空の黒い鉢は
東の処を小片に切られて、ゆっくりと光で充たされる；
星々は水を一杯に張った斑岩の水盤に浮かんだ木の葉のように
旋回し回転させられ、夜は
沈んで流れて退いてゆき 君の眼には見えなくなる。

そして、時間と共に際立った自分の砂漠の上にもたれて
彼は 夢の巡礼者たちが歌いながら登ってゆくのを見詰める；
彼は彼らが腕を空で上げるのを見る、
彼らの手が、地平線で切られて、
きらきら輝き 音もなくひらひら動くのを見る、……
ピエロは身動きし、夢の中へと眼覚める。
砂漠は空っぽで、小塔と城壁は星の光を浴びて輝く；

それらの下では、まどろんでいた群衆が向きを変えて溜め息をつく。

そしてピエロは、頭上の闇の中を凝視しながら
 見るのだ 眼の前の影を光を顔々を；
 音楽の森の中をひらひら動き回る足を手を；
 そして木霊と芳香が彼の周りに
 それらの間の銀の糸と織り混ぜられ、それが苦痛となる；……
 ピエロは闇の中を凝視して、溜め息をつき、
 再び自分の夢の中へ入ってゆく。

[IV] 演奏会の後で

音楽が薄れてゆく、光は壁を上ってゆき、
 天井に溜められて
 襟巻と外套をはおろうと骨折る両腕で
 よろよろ揺らいで急にかしぐ影で動き、
 眼をまたたかせている愚かな顔々の上に溢れ出て
 それから天井の方に吸われて再び溜められる。
 それで私たちは身じろぎし立ち上る、
 私たちは幾つかの道をとって込み合っている通路を進んでゆく
 香気と気の抜けた無意味な話の幕を通り抜けて；
 そうして私たちは進む、頭の中に音楽を鳴らして、
 私たちは息をひそめてハミングし、再び耳にする
 進んでゆく間中私たちに躓きまとう幽かな反復旋律を、
 だがそれが私たちには 何の句か把握できないし、敢えてしようともしない。

薄明が流れ下ってゆき、一漕ぎ一漕ぎ
 光の泉が淡い緑の空に花開き、
 壁から壁へ街路から街路へ吹かれてゆく；
 足の迷路を越えて
 それは縫うように進む、パイプ煙草と巻き煙草の煙を越えて。
 腕を組みながら私たちは この反復旋律のところまで歩いてゆく、
 私たちの頭の中の この薄れた捉えどころのない幻にまで、

それを私たちは思い出せないか、さもなくば忘れていたのだ。

闇の潮が私たちを溺れさせる、一波一波と、
それは私たちに澄んだライラックの影を投げかけ、
細長い岩棚沿いに尖塔から光を一掃し、
日没を齎す尖った屋根を鎮める。
私たちは休止する、私たちのつないだ手を星の
遙かな静かな永遠の身ぶりに向けて上げようとして。

そうして私たちは歩いてゆき、物も言わずに眼を上げる。
腕を組み合って親密な話し合いをしながら；
些事の霧の中を
私たちは歩き、立ち止り、そして歩いてゆく

私たちの周りに白く粉々にされた確実な事柄の泉の中を、
しばしば反復される心を乱す音楽に調子を合わせて、
いつか私たちを包むことになる闇の中へと、……
それが達せられる時、全ては達せられるのだ。

織り込め、君たち光を放つ花々よ、織り込め
黄金の工夫を 闇の低く下げた盾の上に。
私たちは 隠された音楽に合わせて、夜から身を起す、
私たちは笑って泣き、そしてそれから夜に私たちは屈するのだ。

[V] 肖像

私たちの間に君の手を持ち上げ、幽かに君の顔を上げ、
君の眼から不透明なカーテンを引き開けたまえ。
ここを歩いてゆこう、影にそっと遮ぎられながら
そして注意深く些事について話そう。

手当たり次第に軽く話し合おう：今晚の映画のことを

途切れた会話を一語また一語繰り返そう；
 友人たちや幸福について。闇がよろめく、
 私たちがかつて共に聴いたことのある音楽を再び聴いている間

その音楽は私たちの掌と掌の間に血を湧き立たせて歌っていたものだったが。
 さあ、上げたまえ 君の顔を、君の薄っすらと白い顔の上で
 甚だ軽やかに動く君の小さい口の端を；
 超然と人生について話したまえ、若さの測り難さはあっても

純朴でもある人生について：若くて純白でよそよそしく
 君は私の傍らを この影となった通りを 歩いてゆく；
 私の手で君の小さな胸はそっと置かれ、
 君の笑いは 私たちの足の律動を乱す。

君は大層若い。だから卒直に君は信ずるのだ
 この世界が、この暗くなった通りが、この影となった壁が
 褪せることも冷えることも喪くなることも決してあり得ないし
 君が熱烈に知っている美で明るくなるのだと。

だから君の手を上げたまえ、君のめったに見られない顔に
 そして不透明なカーテンを君の眼から引き開けたまえ；
 人生について、素朴な真実について、深遠に語りたまえ、
 その間 君の声は卒直な驚きで澄んでいるのだ。

[VI]

闇が昇ってくる
 軽やかに 降ってくる光の淡い翼の上に。
 もうろうと霞んだ壁が 私たちの前にもうろうと浮かび立ち
 それから再び仄かな緑がかった空に寄りかかる。
 ゆっくりとヴァイオリンで青ざめて黙したまま
 私たちは歩いてゆこう 壁の上でライラックが

その手を揺り動かし もたれて倒れる処へ、
暗闇が深まって私たちの視界がきかなくなる時に。

聴きたまえ、もう一度その沈黙が歌う有様を
あなたがそっと上げて私の上に置く
清らかで美しい細っそりしたあなたの手の間で
あなたの日夜について歌うのを。
聴きたまえ……もう一度 私たちが一緒に聴くこの音楽が、
仄かな驚きで細っそりとし、私たちの間で
近か近かと、以前私たちが見聞きした時のように、
今 音一つ立てない完全な輪となって鳴り出すのを。

あなたの手を私の手の中に入れて、置いて下さい
あなたの定かならざる花の顔を薄暗がり。
一日の この液状の終りに
私たちは花卉のように漂うのだ、何故なら私たちは
罨香でふらふらしている沈黙を僅かに持ち上げて
またそれを落とすのだから。

私にはあなたの顔が 私の頭脳の中の薄明を透かして見える、
忘れられた事柄、思い出された事柄の薄明の中を、
それは通路なのだ、音楽で暗く冷たくなり、
幽かなので見えない通路なのだ
私を喜ばせようと静かな音に包んであなたを
つれてきてくれる扉まで 私を導くのは。

では 出かけよう、あなたと私とは、夜が更けてゆき
繊細な藍色が 空を染める
薔薇色を 薄めてゆく間に；
私たちは二人だけでそこへ行こう、あなたと私は、
そして木々が影の中から裸で歩み出すのを見ることにしよう
婦人がたが両肩をすくめてガウンから顔を出すように。

駄目だ、静かにしてくれなければ、全く話さないでくれ。
 この銀の星が蒼ざめて沈むのを見詰めたまえ；
 ほら、その落下がたてるさざ波が
 水溜りの面を微笑を包み隠しながら蹴立てる。
 それは私たちを冷笑するのだろうか。私たちは顔を上げる。
 あなたの顔にはあなたの微笑みの影が
 眼の中で震えている 二つの水溜りに降る雨のように。
 あなたは私を見て 口を持ち上げ 形作るのだ
 言葉の姿で沈黙を。

手を上げて髪に触れたまえ
 顔から後ろの方へ翼のように
 分けてあるだけの髪に；そして沈黙を置いて
 私たちの夢を織りたまえ ライラックのようにあなたの髪に。

[VII] 交響曲

闇が昇ってくる
 ヴァイオリンの黄金の翼にのって
 そして明るくなる、まるで影の指が
 柔らかい月の銀の弦の上をさまようみたいに
 優しく奏でられる音楽にのって。
 すると、あらゆる沈黙が滑らかに歌い出すように
 銀の鐘が人を活気づかせて聴えてきて
 それに追いかけるように素早く登ってくる、
 細々としたフルードが、クラリネットが；
 優雅な香りの仄かな悔恨が、
 弱音効果で奏でられたヴァイオリンが再び鳴る時に、
 細い銀の痛みが織り混ざった
 敵かな角笛の黄金編みが。

震動せよ、君、手打鈴小太鼓よ、ぱっと燃え立って叩けよ。

突風のように星々は群がり群れて
 月をこの世界中に引き回す。
 鳴り出せ、君、かん高き木管笛よ、もがいて旋回せよ
 この——生命と呼ばれる——蒼沢に
 踊りながら結ばれているこれら冷たい手の上を。
 震えよ太鼓よ、叩けよ角笛よ
 全てのものが生れ出たこの闇の下で、
 全てのものが戻ってくるこの闇の下を、
 凍る土よ、燃える土よ！
 塵より起り塵へ歩みゆく土
 そこで美は叫び、欲望のうちに墮ちるのだ。
 来たれ君、遙かなる風よ、起って素早く連れ去ってくれ
 この散らばる死せる塵を この世から。

発熱の動きが今や戸惑っている
 この闇の上で 私たちが美しいと思った物を
 凝視して探したのに そこには
 暗闇以外には何も見つからなかったのだ；
 聞こえはしたが一語も私たちには
 はっきり分らなかった歌の下で；
 「何故」と「どこから」とは私たちには決して分らない
 ヴァイオリンの音が起り消えゆき飛び去った時に。
 私たちは踊りに踊る、その間 私たちの顔は
 明るくなり、暗くなり、再び各々の席につく
 暗い壁という壁のそばで そこでは花の穂が
 掲げ香炉のように揺れ、その部屋の壁を
 香水を振りかけられた鏡で覆う そのため喜ばせられるのだ
 私たちは 微笑みが約束されると [この行消されている]
 それを取り消せるのは今や時の経過だけだが；
 それはいつも一つの顔を返してくれることだろう
 私たちが触れ合って別れる前に色々な思い出で
 互いの心を動かそうとして近づき合う時に。
 豎琴が暗闇をなだめて 私たちの膝の

神経質な素早い動きを静めようとする
 それはその闇を戸惑わせるのだ あらゆる空虚な夜々を越えて
 きらきら光る小さな明りで、
 私たちが年老いて孤独になり賢明になって
 眼に影を浮かべながら、考え、微笑む時に。

震動せよ、君、手打鈴小太鼓よ、ぱつと燃え立って叩けよ。
 突風のように星々は群がり群れて
 月をこの世界中に引き回す。
 鳴り出せ、君、かん高き木管笛よ、もがいて旋回せよ
 この——生命と呼ばれる——贅沢に
 踊りながら結ばれているこれら冷たい手の上を。
 震えよ太鼓よ、叩けよ角笛よ
 全てのものが生れ出た闇の下で、
 全てのものが戻ってくる闇の下を、
 凍る土よ、燃える土よ！
 塵より起り塵へ歩みゆく土
 そこで美は叫び、欲望のうちに墮ちるのだ。
 来たれ君、遙かなる風よ、起って素早く連れ去ってくれ
 この散らばる死せる塵を この世から。

音楽が休止する、途切れた沈黙が
 闇の中に沈んでいくと告げて、
 するとその沈黙は ゆっくり昇ってゆく
 ヴァイオリンの黄金の翼にのって、
 フルートと豎琴にのって、クラリネットにのって、
 香る仄かな悔恨へと。
 私たちの影が融け合う、すると私たちは始めるのだ
 豎琴とヴァイオリンの踊りを。
 音楽は溜め息をつき まさぐり歌う；
 その間私たちは、銀の翼にでもものっているかのように
 闇のゆるやかな炎の周りを旋回する
 猟犬と獲物の息もつかせぬ

無情な遊戯をして、この世が潜んでいる
闇の上の 熱を發する旋回だ；
私たちが築き上げたこういう安全な壁の内側で、
その向うの飢えた石の森の中までは
私たちは決して凝視したことはないが、
その森では多くの夢が吹き飛ばされているのだ
木の葉のように、空を行き交う星々のように；
これら安全に深く根づいている壁が
がらがらと崩れて暗闇が降ってくると
すぐに終りになる息もつかせぬ遊戯をしながら。

仄かに鋭く素早く幽かに
豎琴とフルートとヴァイオリンが鳴る；
闇の中にそれぞれ光を放つ
これら輝く手足、生命を織り込まれている
動きの各々から發する束の間の火花；
衝突から生ずるきらめく火花の各々、
それらは苦痛から放たれて生きるのだ ただ
この奇妙なまでに甘美にむやみに踊り続けるために
そして遂には それは苦痛で冷たくなって
光を失い、再び闇の中へ沈むのだ。

素早く幽かに仄かに鋭いのだ
このヴァイオリン、フルート、豎琴の踊りは；
戸惑った動きを示す生命の全ては
一つの小さな顔は、その顔にはもっと明るく燃え立つと
動きが扇られるのを各々が凝視したのだったが；
そして手の小さな火花は各々
一瞬保たれてから吹き飛んで 闇と
沈黙になった 顔の火花と共に。

それなら素早く旋回せよ、これらの壁が
がらがらと崩れて 暗闇が降りてくるまで；

それから素早く踊れ、小さな妖精よ、
 君は私たちの自我の中の火花なのだ；
 土の中の微妙な火なのだ
 それはいつか生命が 私たちの各々から
 吹き消してゆくものだろう；そして私たちだけが
 冷たくぼろぼろに砕けた石の下を手探りする時
 私たちには幽霊のように幽かに声々が聞こえるだろう
 竝琴とフルートとヴァイオリンの音が。
 [判読不能の手書きの数行]

[VIII]

雨、雨……野原一面の銀の粒
 空へと生長していった。
 雨、雨……空ろになった頭脳の中に。
 その眠れる人は身を動かし、眠そうに片眼を開ける。
 壁から壁へ、最も下の塔へまで
 鐘々は黄金の翼にのって軽やかに滑り降りる。
 一時間が、また一時間が
 時間から剝ぎとられ、地上に捨てられる。

彼は横たわり耳を澄ます、鐘々が
 彼の生命を反響させて遠去ける間。その幽霊じみた海は
 音を殺した足どりで立ち上って歩いてゆき
 彼が横たわり寝返りを打っている処で暗闇を揺する；
 それからまた鐘々が。

雨、雨……鐘がもっと低い鐘へと
 低くなり降りていった、降りていった、降りていった。
 忘れないでくれ、忘れないでくれ……
 生命は推移ではない：それは終りなき反復なのだ。
 明日 君は起き上り、君のカーテンを引き、

窓辺で、悲し気に下を見おろしながら
眺めるのだ 星々を、沈みゆく闇で蒼ざめた
君の唯一の永遠の美を、そして溺れるのだ；
無数のささやかなものが君の前に立ち昇るのを見、
君の鏡の中にもう一つの皺を見つけ、顔をそむける
昨日 そこに見て顔をそらしたように。

忘れないでくれ、忘れないでくれ、
塵として君は現われ、塵として君はいつか消えるのだ。
この古い壁の上に手をねじ曲げて
色々と骨折って投げ上げてみても無益なまま。
忘れないでくれ、君の人生がますます明白に
君を 都市が輝いている処まで険しい山頂を導いていった有様を；
君の心の砂漠へと君を導いていった有様を、影だと
君に分ったものを、夢を、そこに探し求めようとしたのだ；
忘れないでくれ、この道からは戻りようがないことを
如何なる難題が君の空の星となってくれても；
忘れないでくれ、人生は君を捨てはしても決して変化はしないのだ；
人々が一たび泣き叫んだ処では 人々は常に泣き叫ぶだろう。

かつて灰色に塩気だった海岸に
彼は立ったことがあった。風の鋭い両手が
彼に素早く触れて 彼の衣類をびんと引っぱり
立ち止ってじっと彼の眼をのぞき込み
それから背後に走り込んで再び彼の衣服を引っぱった。

塵で君は現われた、塵として君はいつか消える……
彼の頭上で大きな海がその壁を揺すり
その砕けた破片が小さな波の上の
彼の足元へ旋回し、再び砕けてそこdegatagat鳴った。

奇妙なことだ、と彼は思った、手を当てて風の顔を押すのは、と；
このように私が一人で立っていてさえ

常に何か身近かなものが、何か殆ど思い出せないものが存在して
 何処からかは私には分からないがやってきては、私が歩こうとする処の
 この孤独な静けさを剝いて変化させる有様といったら。
 ここにさえ「君」と「私」について語るぼんやりした鳥どもは
 泣き叫びながら風下にやってくる。それは奇妙だ、と彼は思った。

奇妙だ、と彼は思い、塩のように白い空の下に立っていた、
 滑らかなずっしりした小石を撫でながら、彼は投げ上げては受けとめていた；
 どうしてこの人生では 何も成し遂げられないのか、
 どうして我々が大切に思ってきた骨折りを時は粉々にし 変えるのか；
 我々は自分の家を一固り一固り骨折りながら建てるのだ
 子供たちが取り壊してはまた建て直すために。
 彼は自分の岩が海でシューと音を立てるのを見詰めてそれを奇妙だと思った。

彼の足元では さざ波がシューと音を立てて展がり消えていった……
 塵で君は現われた、塵として君はいつの日か消える
 如何ほど君の魂が、壁から壁と
 泣き叫びぶんぶん回りがみついても……
 海は彼の足元の小石の間でくすぶっていた、
 海ぎわは白く巻き毛をなしていた、紙が燃える時のように、
 そしてゆるやかに脈打ちながら移動する砂を泡立てていた。

さざ波が彼の脇腹にシューと打ち当り
 円柱状の月光は降り注いで波から波へと砕け
 再び落で粉々になって沈んだ。
 彼は遂に横になり、濡れた身体が輝くのを見た
 海の舌が素早く触れてゆく時に；
 彼は身体の下を波が流れては別れてゆき
 それから髪のように身体の周りを流れてゆくのを感じていた。

奇妙だ、と彼は思った、遙かに光が瞬くのを見詰めているのは、と、
 何故 我々の人生は全て無益な挫かれた夢なのか；
 あの、脆い翼を闇に羽搏いている光のように

この暗い砂の上を流れるこれら波のように。
奇妙なことだ、私がここに横たわって考え込んでいるなんて；
何故ならいつの日か我々は皆、光、波、そして全ては
暗闇の海が我々にそっと触れるのを感じ取り、
一人一人暗闇の中で我々は消え去るのだから。

そして彼は横たわって見詰めていた 己れの緩慢な手を
砂の上に忘れ去られた海草のようなのを
そして考えたのだ：我々はやみくもに絶望しては壁に手を打ちつけ、
我々は手の平を澄んだゆったりした空中の星々に上げるが
それでもそれらに触れないのだ：それらは我々に見える星ではない；
我々には分らず、我々はただ探し求めて凝視するだけなのだ、
海に映える落ち着きなき光、光を、と。

闇が砂の上をゆっくりと近づいてきた
そして、彼が眠ると、それは彼の眼を充たした；
すると海が接近してきて その手を走らせるのだった
軽やかに彼の手足に背に大腿にと。

[XI] 恋 歌

では私は 深遠な意味の廊下を歩いて行こうか
注意深く直立して（私は見かけより背が高い）
ある扉まで……そして敢えて
それを開こうか？私は私の精神の髪を撫でおろす
たびたび変更した言い回しを再び修正して、
それが最初どういう語句だったかを忘れてしまった程だ；
それで私のネクタイを整える：私は本を一冊持ってきていたのだ
それから坐る：私たちは最悪の事態は通り過ぎた。

それから私は注意深く何杯ものお茶の間に坐ることになるう、

額に汗をかいた時のように幽かな発汗を意識して、
 (香りの高い巻き煙草の匂いはいつも私を困惑させる)；
 私は坐るだろう、非常にはっきりくつろいで
 硬ぼって背を直立させ、膝に到るまで礼儀正しく
 何本もの話の織り糸に繋がれた厳いかめしい玩具おもちゃの風船の間に。

そして私は敢えてしようか
 (私はもう一度髪を手で撫でおろした)
 だが私の心の窓はばたんと閉じて、私は部屋にいる
 一杯に溢れた会話の、宝石で飾った手の、部屋に；
 ……ここで人はゆっくりと花梗をはぐ。
 ここは余りにも憂とおしい、私は立ち上って歩く、
 しっかりと沈着であることを手で示しながら。

さて、私は敢えてしようか、
 彼女の入り組んだ髪に軽やかな輝きを誰が見ようか？
 私は企らんだ姿勢をとろうか、それとも立って……
 おお、……氏？ あなた大層親切で……
 再び扉が私の心の内側でびしゃりと閉じる。

全然全く……

カップを元へ戻せ、
 戻ってナプキンをつまみ上げよ。

私の舌は、最後の幽かな沈着が隠れている碧なのだが、
 私を見捨てる：私は退き、後退する、
 私の足元に集まる視線を意識して、
 砂を踏みつけているみたいに感ずる。

それでも私はほんのしばらく頭を上げられよう。
 世界は虚飾の微笑の背後で回転する。
 そして今や、夕べが香しく西に横たわり

生命の最後の幽かな鼓動が空の下に薄れてゆく間
私たちは二人だけで行こう、私の魂と私とは、
このくすんだ通りを 空ろな拍子に合わせて；
今や静まり消えてしまった
足のリズムに合わせて。私は一人で歩いてゆこう、
敢えて行こうとしない招かれざる人として
饗宴が友にも敵にも用意されている処へ、
その勇気が最後の分け隔てのない門を妨げとし、
石の弓形門の門口の物乞いたちの仲間には敢えてならないで。

変化につぐ変化：世界は幾つもの世界へと回転してゆく、
微細な渦巻へ
不注意な母指についた極微の土へと。
今や私は一人で行くことになろう、
私は石の通りを反響させるだろう、夕べがやってきて
踏みつけてゆく間に、空間と持ち場を、空間と持ち場を。
私が、葉も花も共々 大層入念に世話をした
あの、私の心の中に最後に残された美の種子が
闇の中に落下する。

だが十分だ。あらゆる美とは何か。何だろう、私が
両手を手の平を上に向けて空に掲げたり
私が何か謎めいた前途の見込みに あるいは 淡い輝きに
突然の翼に、ある言葉に、ある叫びに
弱々しく震えて口をつぐんでしまうとは；……

夕べは死んでゆく、そして今や夜がやってきて
静かな通りを僧侶のように、灰色に黙々と歩き続け、
それからそっと灰色の着衣をまとって再び横になるので
私もまた立ち上って歩き、夢の中に死んでゆく、
というのも夢は死であり、死は深く探りを入れられた夢に他ならないのだから。
それで私はこれらの通りを歩いてゆくのだろうか、過ぎゆく時が
私の顔に、私の薄れゆく髪に、やさしく時を刻みつける間に。

私は、色褪せた草稿に眼を細めて
床のない廊下にいる僧侶になっていた筈だ。

世界は回転する。ハイヒールと香水の匂う片掛け、
彩色した仮面、そして口と口との接吻：
私たちを笑わせようとする
老衰した老いぼれ役の身振り。

私は時を測ってきた、私は時を測った
親指と小指を張った長さで
掘り出し物を求める人のように：十分健全だと
私は思うが、しかし些か疲れている；
それでも私を寒さから保護するだけのものはまだある、
ゆゆしき優柔不断、変化
と 孤独が。一つ一つの襲が
反復しないのだろうか……私が時を測り、私が時を測っている間に……
彼の言葉を、思考を、音を立てない空ろな身振りを、
時がかつてはあれ程にも華やかに飾り立てたものを。

泉……影立った壁々、そして闇の中での接吻。
私も、また；一度は若かった、私もまた；感じたことがあるのだ
生命が全て、ささやかな一語を聞いても、私の内部で溶けてゆくのを；
そして奇妙にうっとりとなってゆく翼が 私の上に
美しい静寂を掻き立てるのを見ることは出来なかった。

私は年老いる、私は年老いる。
私は私の庭の中を歩いてゆけただろうか 夜が
やさしく訪れてくる間に、
そして見ることが出来たろうか 庭の乙女たちが白く
ほんのりと、花壇の向うを踊ってゆくのを。

私は風邪を引くだろう：私は敢えてやってみようとはしないし、
空に再び生れた星々が 永遠に若々しいのを

見つめることもしない。

私は年老いる、私は年老いる。
灯明りの壮嚴な黄金の中に身を浸して
私は坐って、落ち着かぬ影が赤くなり褐色になるのを見詰めている、
それらはそこに漂っているので遂に私が掻き回し、それでそれらは沈む。

私は時を測定する、私は時を測定する。
私には見える 己が魂が、掻き乱されて、眼覚め 突然の夢を
登ってゆき、また落下して
めめめしながら 闇の中で私の近くに押し寄せてくるのを。

それで私は敢えてやってみようか、着実に一時間一時間の
そして一日の壁を築いて、一年を持ち上げ
それがずしりと適所に収まるように、時が
私の顔に、私の薄れゆく髪に、私の心に、時を刻む間、
そこには幽かに最後の長く記憶されていた美が隠されているのだが。

私は床のない廊下にいる僧侶になっていた筈だった
彼の手は、果てしないページページを繰ることですり減っているのだが
持ち上がり、自分の顔を撫でて下に落ち、
一粒一粒積み重った時の埃を動かし、
それからその本をまさぐり それをまためくるのだ；

彼はページをめくり、また向き直る
闇が柔らかな指を彼の眼にのせて
彼の額から灯火を撫で払って彼を目覚めさせる間、そして彼は死ぬ。

[X] 踊り手

私は若者、大層素早く、非常に色白で細身で、
君に付きまとい、君を誘惑し、君に飛び越せと言いつける

磨かれた斑岩のこの床を、
君の両腕を上げさせ、私の膝を抱き締めさせようとして。

君は若者だって？ だが君には宥められないのだ
この炎を、君の髪からの音楽のように
まるで私が空気そのものであるかのように私の中を流れて
私を裸に剃ぎ、私の生命を突然啓き示す炎を。

そうなのだ、私は君を傷つけるだろう、私の小さな踵のように
……それを君は両手でカップを包むように包み、そしてなお……
君の生命を君の意志に反して当惑させてしまったのか？
水銀のような、黄金のような、落ち着きのない小さな炎で。

君は私の生命をすみやかに当惑させてしまった、というも私は
君だと思った幻をつかまえて分るからだ、
君が音楽のように飛んでいってしまい、私の心は
水のように鏡に映った君の顔がある処へと鞆寄せながら戻るのだと。

私は若者だ。星々の白い飛沫^{しぶき}が
私に栄冠をさずけて 粉々に落下した、私のささやかな音楽が奏でられる間
に；
そして君の心は 私の清らかな唇が触れる唇のように
別離し、静寂がその手をそれらの上にのせる。

[XI]

ゆったりとくつろぎながら、彼は灯明りが天井を向うへ
ずっと遠くの壁へ動いてゆくのを見詰めている
積み重なった波状となって、その両方の上を流れて
うんざりさせられる闇を 巨大な頭脳の中を
消えてゆく音楽のように落下してゆく黄金の川となっているのを。
ゆったりとくつろぎながら、彼は彼女がそこに坐っているのを見ている、

灯明りは手のように、自分の髪に置かれており
灯明りは手のように、輝く弱音効果の黄金の
音楽を奏でる鍵盤の上に置かれている。
黄金の中に浸りながら彼女は坐っている、膝の上に
両手は物憂そうに手の平を上にしてくつろいで置かれており
炎がどっと上昇するたびに黄金で充たされ、
炎が沈んで消える時に黄金を振り撒く；
また 彼女は 壁の上の己が影が自由に形の変わるのを見詰めている
その影は昇り降りする灯明りと調子を合わせ
灯明りが鍵盤で奏でる音楽に応じている、
鍵盤から彼女の両手はさまよって
落ちてしまっていたが。

部屋にあるライラックのしろめの鉢は
彼には重くのしかかってその暗がりを変えて
彼が両手にどっしりと感じられる
手にさわれる実体にし、灯明りが着々と
天井で回わず車輪の速度をゆるめる。
灯明りは着実にぶーんと唸り、着実に回っていて
遂に彼の頭は伸ばされびんと張られ、突然はじけてしまう。

何か他のものを奏でてくれたまえ。

そしてゆったりと彼の頭が
旋回して脆い星々のように無限の断片になり
共に再び渦巻き、再び旋回するのを見る。

何か他のものを奏でてくれたまえ。

そして彼は己れの調子を軽く自然に
保とうとする、影が投げかけられるのを見詰めながら、
臆病な影が 彼女の喉元で
闇の中から彼女の周りに手のように繋がるのを見詰めながら。
彼の眼はせかさされた指のようにまさぐって
彼女の衣装を留めている狭いベルトの周りを飛び交い

軽やかに背中と腿の線を辿る。
彼は己が頭が火花を発しながら分解するのを見る。

何か他のものを奏でてくれたまえ、と彼は言う。
そして闇の上を

彼の頭は月のように眼の背後を漂う；
脹れながら、途方もなく後退しながら。彼は眼を閉じる
人が二つの大きな叫びを隠すように抑えて
乱された闇の上に一つの幻を見る時に。

あたかも彼が 彼女が階段を昇るの見詰めて
膝をしなやかに使う彼女と共に立ち上り、
彼女のスカートが一線一線渦巻くのを見、
変わりゆく影がさざ波立って収縮する筋力の後で
起ち上るのを見たかのようにだった；微妙な腿、
背と喉と髪付裳裾との律動。
はちきれんばかりの月よ、車輪が彼の頭の中で空回りしている。
あれは何だったのだろうか。不快な雨のあの急襲？
彼は己れの人生を歩んで終りに到達して、
それを回転させるのだ 人が壁を回転させるように。

.....

彼女は演奏する、そして優しく演奏しながら部屋が
崩壊するのを見ている、それに夢のように灰色の壁が次第に消え失せ
沈んでゆくのを、その間優しく奏でられる音楽は
ライラックの香る薄暗がりの中をそっと流れてゆく。
彼女は花なのだ 流れてゆく川面に
軽やかに投げられて淡々と
柳が身を乗り出している静まった兩岸の間を進んでゆく、
月が桜ん坊の衝立てを見すかしているのを見詰めながら。
丘陵は暗く涼しくなり 澄んで遠く離れて
その影の中で春は止って憩っている。
彼女はここに永遠にただ留ってられようか ゆるやかに雨が丘陵に斜めに降
りかかっている処に、

胸に星の光を雨のように柔らかく注がせて；
彼女はこの川の上で永遠に夢みてだけいられようか
春という春を通過してある春に戻って、
その春は圧倒的にゆっくりした視線の中で、昼夜の美の中で
残酷に花開いたのだ。

彼女は永遠にただ漂っていられるだけだろうか、こちらの
大層くっきり影になった 雨のヴェールで妨げられた道を
空色の展がりの方へ そこではひょっとして星々が華奢な行列聖歌となって
再び彼女の心から静寂を詠唱しているのかも知れない。

これを彼女は見たのだ、あらゆる空ろな身振りの彼方に、
彼女にとっては生き残ったままの粉々になった春の
謎めいた残骸の彼方に、その春は彼女が優しく演奏しながら
再び一つの全体へと築き上げようとしたものだった。
これを彼女は見て、聞いて、奏でたのだ；
その間彼女がさまよっているこれら幽霊のような春の彼方に
彼女は再び見たのだ、苦痛の暗い眼をした一つの顔を
それは今やひもじさをぬぐい去られた時と空間とで静かになっていた。

ゆったりとくつろぎながら 彼は灯明りが闇に
どよめく果てしなき波を打ちつけているのを感じている、
雷とばかりに轟く素早い寄せ波は素早く退いてゆく。
彼の頭は彼から、パッパッと音立てて火花を引き出しながら垂れ下り
彼の眼はせわしない指のようにまさぐり飛んでゆく
彼女の喉の近くの臆病な影の間を、
それは彼女の衣服を締めている幅の狭いベルトの周りにも、
そして彼の眼は 背と腿の線を軽やかに辿る。
彼は己が頭が 火花また火花を発して崩壊するのを見る
それで彼女は二つの叫び声を聞いたかのように、向きを変える。

彼は立ったまま見詰める 彼女が階段を一步一步
微妙なしなやかさを見せて登ってゆくのを、

いつも彼を驚嘆させたこの神経の強さを；
喉元を上げ、衣服には薄くきびきびと渦を巻かせて、
彼の眼の前を裸の筋力がさざ波立つようだ。
はち切れんばかりの月：車輪が彼の頭の中で空回りしている、
健康な切り立つ壁に軋み音を立てながら、
そして再び火花にも共に渦を巻かせて旋回する。
振り向いて彼女は立ち止り、そこで身震いして、
彼を憎むのだ 彼が着々と階段を登ってくる時に。

[XII] オルフェウス

ここに彼は立っている、永遠の夕べが降りてくる間
するとそれは灰色の壁と壁との間の夢のように
幽かに降りてくる、幽かに降りてくる
収縮して上部の欠けた石の二つの壁の間を、
深まってゆく静寂をのせた二つの壁の間を。
ここに彼は立っている、床に木の葉のちらかっている中を；
蔽かな銀色に泉がちらばっている中を、
扉の前の滑らかな緑の芽の間で
彼は立って歌っている。
薄明りは常に落ち続ける水で切断され、
決して枯れることのない出芽した花々でどっしりと占められる
声は絶えず呼びかけ、絶えず呼びかけている
甘美に控え目に。

私は彼女だ、無数の顔々の中の一つとして
あなたに、あなたが優しく奏でる音楽に 従い；
あなたと共に手に手をとって ささまざまな場所を歩き回り
森の中を恐れ気もなくあなたについていったのだ。
私は彼女だ、雨の中を織り込まれ、
あの、あなたが私に奏でてくれた音楽に傾いていった；
冷えた手をあなたの上に置き 無数の口で歌った彼女だ……

彼はその声を聞く、彼はその声を再び聞く……
私は彼女だ！ 私は彼女だ！

春が寒い通りの壁面を動揺させ
凍てたあちこちに苦痛の銀の種子を撒く；
ただ微笑している静かな顔々のように牧き場の向うへ
蹴立つ流れや、彼女の足を知っている草などを越えて。

これらの夢は鎮められぬまま彼の頭脳から軽やかに起り
大理石模様の音を立てる壁のそばを幽かに歩いてゆき
やがて再び横になるのだ。

私は彼だ、顔々に取り囲まれて
眼で硬^{こわ}ばった幽霊のような闇を凝視していた。
私は顔々で澱んでいる闇の中で手を上げる
私は叫び立てている薄いヴァイオリンの糸を切る
私たちが一緒に歩いて夢みていた処へそっと出かけてゆきながら。

私は彼だ、美に気が滅入って、暗がりを
流れてゆき、その暗がりを横切った。
影の落ちつかぬ手足が私のそばで上下しては輝いた。
私は頭脳だ、地上に横たわって
暗がりの上に影の断片となって花開いたのだ。

これらの夢は鎮められぬままに軽やかに苦痛のうちに生じて
大理石模様の音の壁のそばを幽かに歩いてゆき
それから再び横になるのだ。

そして私は 影の手で持ち上げられて、
そっと進んでゆく、私たちが一緒に歩き夢みていた処へ
私たちの合体した肉体の上で静かに奏でられていた音楽に合わせて。
影の手足は幽霊じみたサラバンドの中で回っており
彼らの手は私に触れるのだ、彼女の手が触れてさまよう時に。

私は彼だ、私は彼だ

雨を受けようと彼は手の平を持ち上げたのだ；
その夢は、大層幽かに歩き、幽かにくつろぎながら、
今や身を起してまた歩き出す。

そして私は、思い出多い春を歩きながら

彼女の影立った眼と反らした喉とが
笑いで甘美に湧き立って溢れるのを見たのだ；

私は この黄金を捉えた手なのだ；

私は 彼女が歌うのを聞いた彼、

彼女が穏やかに彫られてゆくのを見た彼であり 私は進んでゆく

これらの夢が一度は鎮められたのに今や苦痛のうちに軽やかに立ち昇ってゆき
向きを変え 生長し それから再び横になる処へと。

私は彼だ、私は彼だ

闇を向うへ闇を向うへと

苦痛の糸で細い網を織ってゆき

雨の幽霊を畏にかけたのだ。

私は彼だ、眠らずに眼をこらし続けて、

影が続々と音立てる大理石の壁を横切ってゆくのを見ていた；

私が沈みはしても溺れることの出来ない海を。

私は彼だ、私は彼だ

手の平を上げて雨を受けようとした；

彼の夢は 大層幽かに歩いてゆき、幽かにくつろいでいたが

今や起き上って再び歩き出す。

ここに彼は立っている、永遠の夕べが降りてくる間

それは夢のようであり 灰色の壁々の間を

幽かに降りてくる、幽かに降りてくる

縮んで上部の欠けた石の二つの壁の間を、

深まる静寂のをせた二つの壁の間を。

ここに彼は立っている、床に木の葉のちらかる中を、
 厳かな銀色に泉がちらばる中を；
 扉の前の滑らかな緑の芽の間に
 彼は立って歌っている。

[XIII] 哲 学

翳った道を硬ばらせる日光の
 まんじりともしない炎をせき止める茂みを
 揺るような縮んだ胸の妖精はいないし
 つきまとう静寂がいつか眼覚めることはないし
 動くこともない。

如何なる歩みも煙った藪の中で震えはしない
 そこでは明るい葉が斑の影へちかちか光って
 空っぽの空地を覆う綴錦となっており
 震えて鼓動しているツグミを鎮めようとし
 脅えさせるのだ

その冷たい手を触れて
 遂に彼女は降りてきて夜へと溶け込む
 ヒマラヤ杉の間で、光の上に跳ねかかって。
 光は各々の墓の辺に在る折り畳まれた闇に
 ぎっしり詰っているのだ、

その墓標は暗がりの中で幽かに輝いている
 その中を縫って鳩たちがそわそわと訪れている、
 壁と壁との間を泳いで 人々がいる部屋の
 静けさを仄暗くして身廊にしてしまう
 思い出のように

そこでは光も ガラスの薄い冷たい板を壊して

蝶のように床に落ちるようなことはない；
 一方影は扉の中でひしめき
 枯れ葉の中でささやく、地上をずっと
 通り過ぎてゆく時。

ここで日没は、その旋回する黄金を採るが
 そこには喜びと悲しみとの相克の中で
 胸は鎮まらないし、如何なる生命も
 薄く冷たく音がしなくなってゆく丘陵や峡谷を
 燃え上がらせたりはしない。

[XIV] 四 月

どこかでは細っそりした声なき微風が起って
 ポプラの手をはずし
 下の水溜りの顔に静かにさざ波を立てている
 そこにはハシバミの木立がそれぞれに立っていて
 それぞれ独自にすっきり分けた髪で覆われている；
 そして半ば眠ったように半ば目醒めたように映されて
 細っそりした白い手をその水溜りの胸に
 投げかけて、そこで夢みている、夜明けに
 立ち止まっている乾き切ったハンノキの渴を癒さんと。
 ここに隠れたスマイルが初めて姿を見わす。

どこかではムクドリモドキが ゆっくりと旋回しながら
 藪の上の空に果てしなく次第に狭まりゆく円周を
 描きながら、おずおずと跪く、
 流れの岸に、息を呑み、見詰めながら
 深い水溜りの中で震えながら
 己れ自身の姿になってゆく。ここに若い木々の葉が恥しそうに現われて
 ただ交差して恐怖に震えている
 銀色の袖のようなハシバミの両腕にしがみつく

一方ハシバミの木々の周りの光は 己が身の上に
呪文を織り上げて その落ちつかぬ眠りを静めようとする。

径の中には やさしい緑に覆われたカンパの木々で
白いものもある。日没が
とあるひっそりした森の上に綵錦を織り上げる、
穏やかに静かに、そして木々の葉は
半ば衣服を着た木々に儼かな黄金を着せるのだ。
どこかでは少女が一人 細っそりと白々と進んでゆく、
日没が彼女の眼の水溜りの中を泳いで
彼女の牧羊犬を出迎えにゆこうとしている間を、やがて夜が
澄んだ暗い翼を広げて降りてきて あやし冷やし
霞ませるのだ、この世を、襷の襷に至るまで思案をめぐらせながら。

どこかでは星々が静かな列を重ねて
回転してゆく空で跳ねて開花する、
その間 夜鳴き鳥の歌は鳴り響き
上方へ舞い上がり、細い月に突き当って
銀色に粉々になる。幽かに照らされた道では
溜め息をつく風が 霧の中でしっかり掴んで揺するのだ
真直ぐ立つ弾力に富んだポプラの木を、
それで遂にその伸ばした手は 掴んでいた手を開いて離す、
するとそれから風と空とは身をかがめて接吻する
その純朴な冷たい白っぽい息を呑んだ顔に。

[了]

II) 『操り人形一家』 *The Marionettes*

一幕劇

登場人物

ピエロ

マリエッタ
 ピエロの影
 灰色の人物
 ライラック色の人物
 秋の霊

空は薄っすらと透き通った青さで、非常に明るい青が白へと溶け込んでおり、星はいつもの順に輝いており、満月である。後ろの真中には大理石の列柱が、規則正しく並ぶ黒い一群れの木々を背に、遠く小さく見えている；その両側には一本のポプラの木の細っそりした優雅な影絵がある。両翼は薔薇で覆われた壁で閉ざされていて、左側の壁には月を背に、孔雀の影絵がじっとして¹いる。真中の前方には泉水と噴水がある。

ピエロが華奢なテーブルのそばの脆い黒い椅子の右前に腰掛けている。彼の左腕はテーブルの上に曲げて投げ出されており、彼の右の、腕は、身体に添って垂れ下っていて、頭はその曲げておかれた腕の上に、顔を正面に向けて乗せられている。彼は酒に酔って眠っているようで、テーブルの上には酒瓶とひっくり返ったワイングラスが乗っており、足元にはマンドリンと婦人用のスリッパがある。彼はこの芝居の間中、その位置を変えない。彼は白黒の衣装を身²につけている。椅子には後ろへパッと、黒と黄金色の中国製綿織のスカーフが掛かっている。

人物が二人、灰色のとライラック色のが、翼廊から正面へと姿を現わす、些かぎこちない律動で。

第一の人物——何て静かなんだろう！空気が動かない。空気は薄暗い柱³廊の中の蠟燭の炎のようだ。

第二の人物——空は青い蠟燭の炎のようだ。空は薄ものの青い絹のカーテンで、風がそれを白い手のようにやさしく動かしている。

第一の人物——いや、空は動いてはいない。風が蒼白い手のように動かしているのは、君の顔の前の髪の毛だ。空そのものが静かなのだ；ほら、星々⁴が薄ものの青い絹に貼り付けられた銀のリンゴのように見えるよ。

第二の人物——星は 人間の身体の熱で茶色になる前のクチナシの花のようだ、空は生きている胸の上で動いている薄ものの青い絹のようだ。何故空は、息づきにつれて絹のように動くのだろう。それはまるで二つの蠟燭の間に跪いている婦人の覆われた胸のようだし、月はその胸から吊されたローマの貨幣だ。⁶

第一の人物——月は 静かな海の床の上で思い出されることもない胸のようだ、月は溺れてしまった軽蔑された婦人の膨れた顔のようだ。何て静かなんだろう。

第二の人物——静かでなんかない。二本のポプラも静まっていないし；ほら、まるで二本のヴァイオリンの弓のように一緒になって揺れているよ、柱廊の前で揺れている二人の盲目の乙女のようだし、柱廊の九本の白い柱は 青⁷い山の前の奉獻蠟燭のように立っている九人の詩人だ、大理石の翼廊の天井に静かな円を描いて燃えている九本の蠟燭なのだ、翼廊では一人の若者が奴隷に用まねながら横たわって眠っており、翼廊の後の空は星がずっしりした黄金で描かれた紫色のビロードのカーテンなのだ、君には空が、星の重みで撓んでいるのが見えないかい。⁸

第一の人物——その一組のポプラは 暗緑の青銅で造られた乙女像のようだ、彼らの影は平たい鏡に映った二本の蠟燭の像のようだ、何て静かなんだろう！この庭には全く動きがない、吹かれている火花のような螢の他には。

第二の人物——待ってくれよ、静かではないよ；誰かがこの庭で動いている、空気が騒ぎ乱されているから、薄暗がりの静かな池に展がるさざ波のように。⁹

二人はマリエッタの登場と共に左の壁の薔薇の背後に引き下る。彼女は全身白づくめの衣装で 正面にしずしずとやってくる。彼女は噴水の所で立ち止り月に顔を向け 突然両腕を上げる仕草をしてから両腕をおろし、左手の薔薇の茂みの所へと進んでゆき 薔薇を腕一杯 顔のそばに引き寄せる。彼女はそれから正面を向き、話している間中ずっと彼女は、かすかに緊張した しかし¹⁰ 優雅な態度で立っている。

マリエッタ——私 眠れないわ、私の狭いベッドは今晚すずしくないの。私のベッドはずっしりしていて熱いのよ、何かしら奇妙な欲望で私を充たすものがあって。どうして私は、はっきりしない名付けようのないものを求める欲

望で一杯になるのかしら、歌を歌っている声が私の夢を騒ぎ乱すからといって。私には私の窓の下で歌われる声は何なのか分からないし 知ることもできない⁽¹¹⁾ので。いえいえ、私は知りたくないのだから、知るのがこわいのよ！私はこわがっているのかしら。でも 私の夜鳴き鳥たち、彼らは その歌声をこわがっている。私の庭でかつて歌っていた夜鳴き鳥たちは飛び去ってしまった； 私の庭は 蠟燭が燃え尽きた時の暗い部屋のような。私は暗くなった部屋がこわいのだろうか？ ああ、でも それは別だわ； 私の部屋は私の身体から眠りを引き出してくれた、石の壁が その覆いとなっている薔薇から露を吸収する⁽¹²⁾ように： 私のベッドは 八月の葡萄園での労働で熱せられた小作農婦の乳房のようだし 私の部屋の空気は 消えてゆくさざ波のような木霊で影となって薄暗がりのスイカズラの匂いのように幽かだわ。今晚 私は 私の部屋では眠れない。何て静かなんでしょう！ 流れるような黄金の夜鳴き鳥の声以外には何の物音もしない。幽かな音を立てながら私の顔の上を、月に照らされた浜辺の小さな波のように満ち引きする夜鳴き鳥の流れるような呼び掛けだけ。何⁽¹³⁾て静かなんでしょう！ それに涼しいけれど、私の顔と身体は涼しくないわ；私の両手は 昼間のタイザンボクの花弁のように熱く、私の身体は真昼がたっぷり浸み込んだ庭の土のように熱いわ。泉水は何て涼し気でしょう！ それはまるで薔薇の間に仰向けに横たわった裸の少女のようだから、大層涼しいのだから 私は顔とほてった両手をその中に入れて冷やしましょう。ここには誰も⁽¹⁴⁾いないのね、この泉水で思いきって水浴びしようかしら。

彼女は決心がつきかねるようにその泉水に近づき、それから突如身動きしたかと思うとガウンをすりと脱いで 水中にそろそろと入ってゆく。彼女は立ち止って耳を澄ます。壁の向うから音がする。

声——ぼくはピエロだ、そして生れたのだ
二月のとある朝
パリの町で、そしてぼくの頭上では
月が照っていて、ぼくの頭の中に織り込んだのだ
呪文を、それでぼくは死ぬまでは——

(15)

声が一斉に——それでその時から死ぬまで
私たちは頭脳が月の狂気に犯されるのだ、
私たちは頭脳が月の狂気に犯されるのだ。

声——毎月、毎月、月が現われると
 私はカビ臭い私の部屋を後にする；
 彼女が己が衣服を投げ棄てると
 夜の明けるまで 裸の夢に——

声が一斉に——彼女が夢を見て夜を遠去けている間
 私たちは夜の明けるまで 愛をたわむれる、
 私たちは夜の明けるまで 愛をたわむれる。

〈16

声——彼女は穏やかに私を見降す；
 私は落ちつかず あちらこちらへと
 歌を歌い施回し跳ね踊り
 あらゆる負債と骨折りとを大威張りで遠去ける——

声が一斉に——私たちは歌を歌い旋回し跳ね踊る
 マンドリンの高音の不協和に合わせて。

声——薔薇の花々は私に頷き溜め息をつき、
 月は空に裸で坐っている、
 寒さは去った、五月なのだ、
 私は探している 誰か遊びに来てくれる人を

〈17

声が一斉に——私たちは探している 誰か遊びに来てくれる人を
 明日はまた別の日、
 明日はまた別の日だ。

声——私の養母は 上で夢をみている、
 今晚は歌って愛するためのものだった；
 あなたの高く閉ざされた庭は私を誘った、
 ここには音楽が鳴っていて私たちの歓楽をもし上げる——

声が一斉に——あなたの高く閉ざされた庭は私たちを誘った、
 おお、美しく優しい乙女よ、来て私たちと踊って下さい——
 おお、美しく優しい乙女よ、来て私たちと踊って下さい！

〈18

歌声が止み、ピエロの頭が左手の壁の上に現われる、それから彼は飛び上って 壁の上に胡坐をかき、マンドリンをかき鳴らして歌う。

ピエロ——あなたの小さな足が私の心を横切った
 恋人よ！

あなたの小さな白い足よ、
 それで今私は 跳ねている庭なのだ
 あなたの歩みの下で。

でもどうしてあなたはそんなに震えるのか、

恋人よ！

それにあなたの小さな手は 冷たい、
 私の庭の中の スモモの花弁の
 ように落ちてしまったあなたの手は。

君は震えている泉水だ、

(20)

恋人よ！

固唾を吞んでわなないている泉水、
 それで私は 君だけが消すことのできる炎だ。

そうなれば私たちだけがその静寂の中にいることになるろう、

恋人よ！

泉水と炎としてだ、
 私が死ぬまでは、さもなければ君は炎になってしまったのだ。

君が白いか細い炎になるまで、

恋人よ！

(21)

小さな細い炎は、
 私のもっと熱い炎を引き寄せている
 私の庭で狐火のように。

しかし今 君は 泉水のように白くて細い、

恋人よ！

そして身震いさせる程寒い、
 君の乳房の先端と先端との間に私を溺れさせておくれ、

愛する人よ！

マリエッタは恐れている。ピエロが壁から彼女の方へ身を乗り出すと 彼⁽²²⁾
 女は両手をぎゅっと胸に交差させて、催眠術にかかった人のように彼を見詰め

る。

マリエッタ——いいえ、いいえ、いけませんわ、私は踊れません！
私にはどうしていいか分かりません、三人の叔母が
話してくれたからですわ、私の母がこの道を通して
夜明けにベッドを滑り抜けて行ったと、
不思議な声が歌いかけてきたからといって、
こんな風に青いピロードのように月の照る
夜 彼女の窓の下で。

〔彼女は私の年齢には殆ど達していなかったのだけど〕
それから彼女は戻ってきたのだった 私の優しい母は、
そしてのろのろと悲し気だった 彼女の白い足は；
しかし更にもっとゆっくりになり、遂に彼女の墓から
甘やかな素晴らしい花が現れ出るに至った
——その花は私だった、と そう私の叔母たちは言う
それで私は決して踊れるようになってはならないのだ。
おお、私にそうしたいなどと思わせないで下さい！

(23)

ピエロ——いらっしゃい、優しい乙女よ、私と踊りに。
ところで私はあなたの三人の白髪の叔母さんたちを知っていますよ！
炎が消えるまで蠟燭の
周りを動き回っていた三四のくすんだ灰色の蛾を、
ああ、あなたはその炎を消させるのでしょうか？

(24)

ゆっくり、一步一步、うっとりしているみたいに、マリエッタは壁に近づいてくる。両手は胸にしっかり当てられ、眼はピエロにじっと注がれて、彼女はまるで夢遊病者のようだ ピエロが歌い続けてその歌を彼女の周りに網のように織り上げている間。

ピエロ——おいで、恋人よ！これらの薔薇は眠らせておきなさい、
ケンの花の間からは かわいい妖精がのぞき見しており、
甘やかな芝生の上では何千という小妖精が踊っている。
さあ、この話を語らせておくれ
私のリュートの動悸を打つ黄金によって、

(25)

それはうっとりさせられてしまう夜の花弁のように雪を降らせるのだから

さあ、恋人よ！ 夜になり始めているのだから、

夜鳴き鳥が呼び交わしている森の中は：

——さあ、汝ら恋人たちよ、悔いることなくやってきなさい

(26)

さあ、遙かなる世界の全てが

私たちの歓楽のための舞台になっているのだ、

おいで、我が心の心よ 忘却の庭へ。

マリエッタはもう壁に着いている。ピエロは突如、手を降ろして彼女を抱え上げる。二人は一瞬、壁の上に身を起して立つ、月を背に一つの黒い影絵が浮かび、それから去ってしまった。ピエロの声が聞こえるが、だんだん幽かになってゆく。

ピエロ——空にいる私の養母よ

(27)

私の明るい手足がひらめいているのを見て下さい！

私は髪を揺すり、足を踏み鳴らす、

するとこの乙女は 壮重で甘美で、

この細っそりした乙女は、ぞくぞくする程白く：

月光で揺れる薔薇の芽よ！

汝の指を彼女の髪の中にさっと突っ込み、

掻き回して月の狂気をそこに織り込むがよい、

汝の夢を彼女の頭の中で掻き回して

その夢を彼女の白いベッドの中で踊らせよ

彼女の夢が全て熱っぽくほてるまで、

平安を追い出してしまうえ 彼女が頭の中の

狂気しか分らなくなるまでに、

私が導く処へついてゆきたいと思ってくれ

(28)

藪という藪の中の夜鳴き鳥が

私の耳へと歌を歌っている間、そして私が望む時に

銀のシークィン飾りをばらまいて増してくれ

私のマンドリンの高い不協和音を。

声々はゆっくり消えてゆき、月は雲の背後に姿を消し、闇の中に舞台を残す。灰色とライラック色の人物とが幽かに薔薇の間に見える。一瞬 木々に鳴る風のような音がして、それは消え去るやいなや、ヴァイオリンの低い調子へと溶け込む。

(29)

第一の人物——急に寒いね。どの位寒くなったか君は感じるかい。風はひどく冷たく、枝々を吹き抜けるみたいに竖琴の糸を引き、盲人が宝を探す時のように唸り、風は死者が友人を探す時みたいだ——ああ！あれは何だったのか。一枚の木の葉： 枯れ葉だ。そこには、別の一枚が。木々は枯れてゆく、秋なのだ； 秋の霊がこの庭のどこかにいるな、君には彼のヴァイオリンが聞こえないかい。落ち葉が私の顔と手に降りかかって大層重い。

第二の人物——全く、木の葉は枯れてゆく。あらゆるものが死んでゆかねばならぬ、そして死んだものは全て非常に重いのだよ。

月が再び現われる。秋の霊は右手の壁の上に坐っていて ヴァイオリンを奏でていることが明らかになる。彼は深い紫色の衣服を着ており、顔はうなだれてぼんやりしている。彼は演奏し続ける、彼が話し続けている間に木の葉が⁽³¹⁾時々ゆっくり落ちる。

秋の霊——私は深紅の薔薇と彫刻された大理石の庭を見ており、夜鳴き鳥の歌はその辺りに 黄金の布のように織られている。だが 庭の薔薇は声もなく動いている、若さが去る時のように夏が過ぎ去ったので。夏は柔らかい麗らかな空をすたすた歩いていった、ほてった顔を上げ 頭にはライラックの葉柄を結んで。それで庭のニンフは、褪せてゆく薔薇の遮蔽幕の陰から彼を見詰めて⁽³²⁾いる、これもまた若者らしく。彼女は胸を手すりにもたせかけており、彼女の乳房は髪影の中にある二羽の小鳥のようだ； 彼女の長い美しい髪は垂れ下り、月が 紡がれた銀のようにその髪で梳かれている。彼らは争ったことはないのだ、きっと争ったことはない、私は思う、なのに 彼女は悲しそうだ、彼女には大きな不幸の予感が漲っている； そして彼女はとりとめのない恐怖で悩んでいるので、心を彼のあとから送っているのだ、九月の一夜の、異教徒風の甘美な悲嘆の彼方へ：

(33)

決して夜鳴き鳥よ

おお、吾が愛しいものよ、
二度と再び雲雀を
汝は聞かまい。

薄明と朝はなおも
汝の窓敷居を軽く叩くだらうけれど；
愛はずっと呼び掛け呼び掛けしても
汝は全く聞こうとしない、
愛しいものよ、愛しいものよ！

彼女の声は彼に届く、彼女自身の枯れてゆく薔薇のように幽かに美しく遙かに、それでも彼は彼女の声を聞き、空を背にして立ち止る； 恐らく彼もまた不安になるのだ。そこで彼は立ち止り、半ば彼女の方を振り向き、束の間は自らの魂を思うさま支配する； 運命と神々が超然と彼を見詰めているので、そのどちらにも彼の宿命は言葉もなく仕えるのだ。彼は 彼女が自らの薔薇の四阿で待っていてくれる処へ引き返すのだろうか、それともそのまま進んでゆくのだろうか。ああ、彼はそのまま進んでゆく、若々しい眼を絶えず前方に向けて 無慈悲な未来を見詰めている。恐らくもっと新たな強力な愛が 彼を呼び寄せたのだらう、恐らく彼は野獣に待ち伏せられて襲われたのだ、暗い森³⁵を突き切ってくる時に、それとも多分 流れを渡っていて足を滑らし溺れたのだ。だが彼女は、枯れた薔薇の花梗の間で 彼が空をずっとこちらへ来てくれるのを待っている； 甲斐なく待っているのだ。彼が倒れた時には 彼女のところへ飛んで来てくれる者は全くいないのだ、ただ、彼が倒れたと囁いてさざ波が泉水を伝わってくるだけで、それも境目に生えている葦の間で蠟燭のように消え去ってゆく； その葦は突然の悲しみに襲われて泉水の上に頭を垂れて、美しく眠っている彼を見詰める。彼女は彼には全く歌わないし、風は彼女の³⁶歌の反復句を巡回させて遠くへ吹き飛ばしてしまった、というのも彼女が悲惨を警告したのは 本物の警告だったのだ、悲惨はこちらへ渡ってきたのだ 本当に：

ずっと愛は呼び掛け呼び掛けするが
彼は決して聞く耳もたぬ、

如何なる顔が彼の上にかがみ込んでも 如何なる口が彼のぼんやりした耳に歌を歌いきかせても。その間 空の半月はずっと 空ろな顔から空ろな顔へと視線を凝らしている、流れに半月を映したまま。

その声は聞えなくなり、ゆっくりとヴァイオリンの弓は動かなくなり、秋³⁷の霊は静かに壁の上に坐って、その庭には言葉のない思案に耽った平和が訪れた。彼は一つの調子で背景を提供するのだが、それに対して引き続いての行為が生ずる、覆いのかかった鏡のように。動きもせず 話をはじめることもしに彼は全体の場面を支配する。

第一の人物——秋だ。秋がこの庭を裸に剥ぐことだろうが、庭そのもの³⁸は変るまい。この庭は年老いており、何千度となく冬の寒さを感じてきたのだ。だが ものは全て年老いてゆかねばならず、我々は一人で老いてゆく； 大地は既に年老いており、大地は 不毛の野で粗朶を集めている年老いた婦人のようだ。やがて静かに雪が大地を恐怖の数々で縞にしてゆくことだろう、だが今、大地の眼には何の恐怖もない、彼女は見たことのないものには盲目なのだ。もはや ぼかんと口を開けたクロッカスも 指をよじる悲哀で広がったケシも³⁹ない； 大地は 髪と共に胸をかかえ込んで背を曲げた 目の見えない婦人なのだ。

第二の人物——ここへやって来るのは衣服を剥がれた春の亡霊たちで、冷たくなり、口もきかず、目が見えない、そしてここにはまた、青い人跡まれな丘陵から風が吹いてくる、その丘陵には日光が物言わぬ黄金をふり撒くが、その丘陵には生命は住まず、恐わがっている羊は冬にそなえて羊舎に集る、獣⁴⁰らしくこっそりとそして鋭敏に冷たく。

第一の人物——木々は空に胸を揺すって軽やかなか細い音を立て、過ぎゆく日々はばらばらになった薔薇のように静かに地上に花卉よろしく散る、甘美に悲しく果てしなく名前を繰り返すみたいだ。小鳥は去ってしまった、ここでは全く小鳥は寒いので呼びも叫びもしないし、泉水は移りゆく空のように灰⁴¹色だ、空の髪の毛が泉水を横切って灰色に漂っている、それは指をかすかに曲げた手のようで、その手の平の中に沈黙した全世界を握っている。

第二の人物——この庭の彫像はどれも冷たくはない： それらは皆頭像だ。木の葉が薄とび色の太枝から身震いして空の丘から滑り降り、月は、月さえも空を吹かれてきた枯れ葉なのだ……ほら！

彼らはマリエッタが登場すると再び身を隠す。彼女はこれまでこの庭を見⁴²たことがなかったみたいに周りを見回しながら正面にやってくる。彼女は炎色のガウンを着ている。

マリエッタ——この庭は何てまあ 変ってしまったことでしょう！ どうしてこんなに変わってしまったんでしょう。ああ、成る程、庭を変化させてしまったのは秋なんだわ。でも、私は変っていない。私はひどく変わってしまったのかしら。

彼女は泉水まで行き、その中をのぞき込む、頭をあちこち回しながら。 ⁽⁴³⁾

第一の人物——彼女が戻ってきた！ するとビエロが、彼女を棄てて、誰か他の人に托したのだらうか。彼の場合には常に誰か他の者がいる。どうして我々は飛んでいって彼の言いつけ通りにするのだらうか。彼を現状通りの白い官能的な動物だと知っている我々が。ビエロが現われる処では 誰かが不幸になるのだから。

第二の人物——私にはもっと酷い。

第一の人物——そうだ……そうだ。私にはもっと酷い。 ⁽⁴³⁾

第二の人物——私にはもっと酷い。

マリエッタ [自分の影像をしげしげと見ながら] いいえ、私は変っていないわ。私は今も本当に美しいわ。

第二の人物——何て彼女はきれいなんだらう！ 彼女は 黒人奴隷たちによって建てられ、炎に囲まれた象牙の塔のようであり、血を流されて出来上がった象牙と銀の小さな影像のようだ。

第一の人物——彼女は 嵐によって衣服を剥がれた細っそりした樺の木⁽⁴⁴⁾のようだ、彼女は 震んだ森に訪れた夜明けに震えている樺の木だ； いや、彼女は 白い川と道路の間に立っている若いポプラのようだ。

第二の人物——彼女の髪は黄金色だ、血と情熱で漂白された黄金色； 彼女の髪は 夜間の大型豹の横腹のようだ。

第一の人物——いや、彼女の髪は黄金色ではない、彼女の髪は 小麦畠に降り注ぐ太陽のようなもの、それは カエデの葉群くしげを梳ってきた日光のよう⁽⁴⁵⁾だ、そして彼女の眼は 夜間の森の奥深くにある池のようだ； 彼女の眼は牧き場一帯に撒かれたアネモネのようだ。

第二の人物——その通り、彼女の眼は 人が溺れてしまいそうな池みたいだ、彼女の胸は 狭い白い池で、彼女の乳房の先端は 一對の星の映像だ、彼女の乳房は そのためなら男たちが生命を投げ出し軍隊が互いに殺戮し合い兄弟同志が殺し合った象牙張りの宝石のようだ。 ⁽⁴⁶⁾

第一の人物——彼女の乳房は 泉水の上で眠っている白い薔薇だし、彼女の息づきのたびにその胸は 薔薇の花床の中の風のように動く； 彼女の乳房は 長い間飛翔してきた二羽の白い小鳥のようだ。何て彼女は美しいのだろう！

第二の人物——何て彼女は美しいのだろう！

マリエッタ——いいえ、私は変っていないわ、それなのに私の庭は何という変わりようでしょう！ 木の葉は音もなく散り、疲れた手のように泉水の上に横たわるのだわ。木の葉は枯れている、恋人を抱いてしまった手のようだ、⁴⁷ 眼の前に幸福を見てしまった人々の手のようだ、さわろうとして手を伸ばしたらその手が泉水の上に手の平を上にして浮かんだ枯れ葉のようだと気付いた人々の手のようだ； 裸の木々は 悲しんでいる顔のように身を傾けている。でも私の手は枯れ葉ではないわ、私の手はまだきれいだわ。

第一の人物——何と彼女の手は美しいのだろう！ 彼女の手は 羽搏い⁴⁸ ている二羽の小さな鳥のようだ、彼女の手は 光と影の中に翅を展げている蝶々のようだ。

第二の人物——彼女の手は 奴隷の手かせ足かせ用に使われた銀の鎖の二個の環だ、それらは 生命と引き換えにされた小さな二箇の滑らかな銀のようだ。何て彼女は美しいのだろう！ 何故 彼女はあんなに悲しがっているのだろうか？

マリエッタ——人は年を取り、美も褪せてゆく、木の葉が秋になると 何らの音も立てずに地上に滑り降るように。私もまた年老いてゆくのでしょう、でも私は今は美しいわ。死以外には 私ほど美しいものはないわ、だから私⁴⁹ は 翡翠色のガウンを着て 私の庭の砂利径を歩いて行きましょう。私が歩いてゆくと 私のガウンの緑色の動きが 私の指の爪の翡翠色に繰り返されるでしょうし、私の髪は黄金で重くなり、髪の重さで私の頭は傷つくことでしょう。私の額も黄金で滑らかになるでしょうし、形ばかりの私の庭の砂利径の砂利で足が傷つくことでしょう。私の頭の痛みと足の軽い痛みとの間に宝石がある⁵⁰ ことになり、銀とどんよりした黄金は 肺結核で死にかけているイタリア人に巧みに探し求められ、私の足の上の紫色は 森の端の狼の眼のような私の孔雀の眼の 赤い瞳に匹敵するルビーで濃くなる。私の孔雀たちは紫色で汚れた白となり 糸杉の木々の下の底なしの池に映った己れの影に向かって叫ぶ。そして泉水のそばのライラックは 泉水の中のライラックを 止むことなく見詰め続けるので 遂に孔雀たちの叫び声はそれらの中を震え続け、それから泉水⁵¹

のそばのライラックが身動きし 音も立てずに叫ぶ、泉水の中のライラックに向けて。そして糸杉の木々は泉水から上方へともがき、星々を庭に払い落とす。

私は欲する——何を私は欲しがっているのか。

風が空の髪を滑らかに後ろに撫でつけている；

風が松の木々を灰色から黒まで梳き、他方私の孔雀の耳障りな叫び声が ヘルメス像の前のトキワガシを震わせる。

そのトキワガシは灰色で、紫水晶の海に浮かぶ白い島の原産で、地中海の⁽⁵²⁾事物の声々で硬ばった風が瑠璃で海に縞をつけ、トキワガシを灰色に色褪せさせた； そのトキワガシは 灰色の壁のような灰色で、白いヘルメス像はインク⁽⁵³⁾の海に浮かぶ島であり、風が空を梳って灰色から黒くする。私は灰色の壁の上に坐ってぶらぶらさせる 私のペンキを塗られた脚を、こみ入った姿全体⁽⁵⁴⁾で、そして私の乳房は、死んでももう千年も経った一對の月のようになっているのだが 私の純い真鍮のベルト越しにずっしりと庭を見詰めていることだろう、庭では月が その影の髪に銀で縞模様をつけている； そして私の孔雀は私のあとをあだっぽく正確について来て 重たげな翼で月光を通路から払い去ることだろう。彼らの眼は貪欲になり 濁り 情容赦がなくなることだろう 年老いてゆく乙女たちの眼のように そして 彼らは近づいてきて 宝石を私の⁽⁵⁴⁾足から翡翠の留め金を私の指先から 食べてしまうことだろう。そして私のたっぷりした髪と目の上の渡金した臉とは 彼らを惹き付けることだろう、彼らの冷たい足が 私の身体に薄らとした十字の印をつける間に。

私は欲する——私は何を欲しがっているのか。

風が空に 月の髪を縞をつける。

月は私が死ぬ時には 私の身体を弄ぶだろう、そして私の孔雀の耳障りな⁽⁵⁵⁾叫びは ヘルメス像の前のトキワガシを枯らしてしまっていた。

幕

[右端の数字はページ表示。43ページが二葉ある]—訳者注

III) 解 説

本稿の I) は、William Faulkner, *Vision in Spring*, With an Introduction by Judith L. Sensibar (Austin: University of Texas, 1984) に基づいて、William Faulkner が生前草稿のまま残した連作詩集 *Vision in Spring* 『春の幻想』を全訳したものであり、II) は、William Faulkner, *The Marionettes*,

With an Introduction and Text Apparatus by Noel Polk (Charlottesville: The University Press of Virginia, 1977)に基づいて、同じくフォークナーが生前自らの挿画入り手書き原稿を自装して残した一幕の繰り人形劇を全訳したものである。

II) は、詩集ではないが、中には登場人物の歌う詩歌が挿入されている詩的な劇であるだけでなく、ピエロが登場しており、I) と密接な関係のある同時期の作品なので併載した。I), II) 共に、それぞれの編者 Sensibar と Polk の濃厚な序論（前者には20頁、後者には24頁）が付されている。以下の短文はその二人の「序論」に負っている。

I) の『春の幻想』は、フォークナーの死後に出版された彼の六冊目の手製本で、三冊目の「野心に溢れた完成された連作詩集」（サンシバーの言葉）である。1921年の夏、Oxford の実家に二歳半の娘と帰省していた Estelle（未来の妻となる当時は Franklin 夫人）のために書かれて与えられたもので、彼女の死（1972年）まで彼女が所有していた原本は紛失したという。

フォークナーは、『大理石の牧神』や『緑の大枝』（共に本紀要前号に全訳した）と同じように、この詩集も公刊の意図があって、1923年には *Orpheus* と改題して出版社 Four Seas Co. に持ち込んだが、同社が六ヶ月余後に、以前に出した『大理石の牧神』と同じ条件を提示したために、同年11月23日の手紙によって、それを取り戻し、以後、生前に公刊はされなかった。

フォークナーは1916～24年頃は、専ら詩作に耽っており、16～27歳の期間に、数百篇の詩を作ったり改作したりしていた。1940～50年代になってもまだ詩作しており、「それらの中には滑稽なものさえあった」(xii. notes)。そのフォークナーが、長短14篇の詩を集成して一度は公刊も思い立った詩集が『春の幻想』である。この作品の「純粋な内容」と彼が「詩人として費した長い期間」とを思えば、この作品を、C. Brooks のいうように、「根拠のない夢の世界に己れを失っていた浪漫派の青年の若書き」として無視すべきではない、とサンシバーは言い (xii)、彼女は入念な考察・評価を試みている。彼女は述べる——この作品はフォークナーの長い自己教育上での転回点を示しているから、欠陥はあるが魅力に充ちた作品である (xiii)。この作品で彼は、自らの夢から覚めて、自己の真の声を見い出すに至ったのだ。凡庸な詩人・夢想者から、秀れた資質を持った小説家への変身を示すものだ。この作品は、Swinburne の最上の抒情詩の一つ“A Vision of Spring in Winter” から自己の詩の標題を取ったものだが、この作品も、『大理石の牧神』同様、ある意味では、作者の内部に反

響している詩的夢想との対話ないし、その注釈になっている。この作品は若年のフォークナーが影響を受けた Conrad Aiken の詩の技巧、就中、〈交響楽風連作詩〉を借用したもので、[I]~[III]、[IV]~[VIII]、[IX]~[XII]、[XIII]~[XIV]の四楽章から成っている〈交響詩〉である。この作品は、フォークナーが耽読した Keats, Swinburne, Tennyson 等 19世紀の世界から20世紀初期の Modernists の世界への、フォークナーの知的な旅の記録であり、スウィンバーン風の抒情詩によって、独力で〈創造空間〉を開拓しながら独自の声を所有するに至る過程のフォークナーを示しているのだ。フォークナーのビエロは、詩人の卵に象徴派の詩人たちが与えた仮面と、現代芸術家たちのビエロ——T. S. Eliot が Laforgue の影の下に書いた詩や、C. Aiken が書いた詩の中の語り手——との合成であり、演戯する詩人の苦境、ニンフに魅せられた有頂天、音楽の持つ記憶術的な性格、などがこの作品で明らかになっている。その他、この作品は、フォークナーの小説の典型的な結末と思われるもので結ばれているが、この作品の形式と内容は、後の彼の小説の形姿と様態を予感させるものだ、という指摘等々、サンシバー女史の言説の各々は、この作品と、若年のフォークナーへの思い入れが成させた鋭い観察と洞察で、共感するしかあるまい。同じことは、II) の人形劇の場合のポークにも言えることである。

『春の幻想』の中の [III] “Nocturn” と [X] “The Dancer” の話者は、*The Marionettes* の Pierro に酷似していると、サンシバーの言うその一幕劇『操り人形一家』は、フォークナーの「初期の最も長く野心に富んだ作品の一つで、彼が1920年の秋に、ミシシッピ大学での同名の劇団との関りの中で、自ら手書きし、装飾を施し、製本したもの」(ポークの言葉)である。一葉全面に及ぶ計九葉のフォークナー自作の挿画付きである。本稿の定本は四部現存する手稿本の一冊が、フォークナーの手書きのまま刊行されたもので、その製作の歴史、現存手稿本のテキストの異同、作品の内容・主題等、ポークの詳細な論考が序論として付されている。サンシバーの場合同様、ポークの、この作品への思い入れと努力に、深い敬意を表するのみである。彼の言う通り、その後のフォークナーの萌芽の全てが、この作品にも紛れもなく表われていて興味尽きない。この時期のフォークナーの詩業(と「画業」)については、Judith L. Sensibar, *The Origin of Faulkner's Art* (Austin: University of Texas Press, 1984) と Lothar Hönnighausen, *William Faulkner: The Art of Stylization in his Early Graphic and Literary Work* (Cambridge: Cambridge University Press, 1987) が詳細に明らかにしてくれた。